

## 異分野交流による大学院の活性化

須磨崎亮

人間総合科学研究科教授 アドミッションセンター

### 大学院を活性化する必要はあるか

筑波大学は大学院大学であり、大学院生の充足率は重要な問題です。しかし、博士課程では志願者数が入学定員を下回る専攻が少なくありません。

昨年9月に中教審から『新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて』が答申され、本年3月に文科省から『大学院教育振興施策要綱』が示されました。これらの文書の基本的な認識は、「知識基盤社会」を支える高度な人材の養成機関として大学院の重要性を強調するものです。たしかに、生涯学習の必要性は一般にも広く認知されています。大学院への期待と需要は大きなはずです。なぜ大学院充足率が低いのでしょうか？

筆者に社会全体を見渡す力がないので、自分の専門とする医学領域で考えると、高度な人材養成は大学院に限らないという状況が浮かびます。高度の臨床医を養成する

施設として、大学院から病院に比重が移されてきました。基礎研究についても、重要な研究成果が製薬会社から発表されるのは日常茶飯事です。考えてみれば、江崎玲於奈先生も田中耕一先生もノーベル賞の仕事を進める上で、大学院は役割を演じたのでしょうか。大学院は分野によっては、高度な知的人材の養成機能を果たす上で、企業や財団など他の社会組織と競争関係にありそうです。実際、大学院志願者の減少は筑波大学だけでなく、他の有力大学にも共通する現象です。今後、経済環境の好転やポスドクの苦境が続けば、博士後期課程志願者の減少は加速すると予想されています。大学院以外でも高度な人材養成が可能な背景として、社会情勢の変化が考えられます。現在では多くの分野で、知識情報を得る手段は大学図書館より、どこでも可能なインターネットの文献検索が主流でしょう。一人当たりに換算すれば、大学院生のための

財政支出は、企業や財団が自分で人材養成のために支出する金額より少ないかもしれませんが。教室や実験室の環境、文献の蓄積、財政支援、社会からの評価などで必ずしも有利ではない大学院が、他の社会組織より効率的に人材養成ができるためには、どのような点に努力を集中すべきでしょうか？

#### どのようにしたら大学院は活性化するか

大学院志願者を増やすための対策として、効率的な広報、社会人もアクセスしやすい入試、奨学金やTA雇用など大学院学生への経済援助、円滑な学位授与、卒後の就職支援など多様なキャリアパスの整備、といった多くの課題があります。もちろんこれらの努力が必要です。しかしより本質的には、大学院が効率的に人材養成できなければ、現状は打開できません。

筆者の考えでは大学院が最も武器にすべきなのは研究水準の高さと共に、学問的な異分野交流の場を提供できる点です。特に、筑波大学は総合大学でありその知的な集積効果を活かします。従来の学部制とは異なる学群・学類・学系など緩やかな学生・教員組織は、この面で有利なはずで、筑波大学を代表する研究に学際的な香りがすることは、多くの人が指摘しています。幅広い領域を含む人間総合科学研究科、TARAセンターなど全学に開放された研究セン

ター、連携大学院の存在は、筑波大学の異分野交流を推進する強力な制度です。一方残念ながら、茨城県の人材育成調査（先端研究の実用化を担う人材育成等検討調査報告書、財団法人日本経済研究所）では、大学卒業生・ポスドクの問題点として「視野の狭さ」が最も強調されています。

大学院生の教育でも学際性を強調して、異分野交流を奨めさせる制度的仕掛けを作っておくことは大学院活性化のポイントと考えます。医学5専攻でも複数の指導教員を指名し、研究発表会を学生主導で組織させ、多様な学会での発表を推奨し、学内外の著名な研究者による講演会への参加を義務付けるなど、異分野交流を促進するしくみが整備されてきました。人間総合科学研究科内で進行中の大学院GP2つも異分野交流を促し、視野を広げさせる試みです。

実験系・非実験系、基礎的学問・応用領域など、それぞれの専攻の事情に応じて、大学院生用のコースワークを整備中だと思われ、各専攻でどのようなコースワークを準備して異分野を体験させればよいのか、また、制度的基盤をどのように作るか、アプローチの方法は多様です。例えば、コースワークを担当する教員の教育デューティを増すことなくという視点もありますし、また積極的に教育を教員評価のポイントにする方法も考えられます。しかし、筑波大

学にとっての大学院の重さを考えると、各専攻の事情を越えて、コア・カリキュラムの策定など学群レベルと同様に、全学的な視野から大学院教育に取り組む組織が必要ではないでしょうか。

### 個人的な体験

筆者はこの4月からアドミッションセンターに勤務するようになり、「どのような新しいメンバーを筑波大学に迎え入れるべきか？」という任務を考え始めました。大学入試の観点からも当然、大学院を活性化するためにも、リサーチマインドの強い入学者を選抜することが重要になります。入学者の活躍ぶりや生物学類などでの評価を伺うと、AC入試は研究指向の学生を集めるのに大いに役立っています。そしてこのような手法は、社会人を含めた大学院志願者にも向いているように思われます。

私は30年前に他大学を卒業後、筑波大学附属病院に小児科医師を希望して就職しましたが、最初の2年間は内科系全体をローテーションさせられました。医学の分野ではやっと3年前から、多様な診療科をローテーションする卒後研修制度が日本全体で整備されました。このローテーション、異分野交流が義務付けられる迄は、例えば小児科医師は小児科の中だけで養成されるのが普通でした。27年間の先駆性だけでも、

開学当時の熱気にあふれた理想主義的教育の一端が伺われます。今でも研究面で筑波大の学際性の恩恵を最大限に受けています。そもそも、論文のインパクトを強めるためには多数の読者に関心を持ってもらう必要があります。異分野交流は大学院教育のみならず、我々の研究にも大きなプラスです。

筑波大学大学院が大研究科に編成された今日では、全学的な組織を作らずとも大研究科内で異分野交流を中心的なテーマにして、教育制度整備や研究推進を進めれば良いのかもしれませんが。研究科の枠をさらに超えた工学や生物と医学の連携、さらには倫理・法律・経済など人文社会科学と医学の交流も魅力的です。このような学際研究プログラムを推進する中で大学院生を育てたいと希望しています。視野の広い柔軟な人材こそ社会からも強く求められており、就職その他のキャリアアップもスムーズに進むはずです。筆者は医学類と共に、生物学類でも授業を行う機会を得ましたが、学生の反応が異なります。生物学類の学生は基本的な原理に関心を向けるのに対し、医学類の学生は研究成果の応用に興味を示します。異なる関心と興味をお互いに理解できることは大きな喜びであり、研究を離れて実際の問題を解決する際にもきわめて有用なことと予感しています。

(すまざき りょう／臨床医学)